

はじめに

情報メディアセンター副所長 龍 昌治

高等学校での新教科「情報」が開始され、学生たちのコンピュータリテラシーは、ますます高くなっています。家庭でのブロードバンド普及も進み、小さいころから情報家電に慣れ親しんでいる彼らが、ワープロの操作やメールの送受信において、戸惑う姿はほとんどありません。

彼らは、親指一本で軽快にメールを扱う一方で、そのしくみや技術にはあまり関心がないようです。パソコンでレポートは書けても、トラブルがおきても対応できず、自分でインターネットに接続することさえできない。使うことはできても、使えるようにはできない。

これに対しては、反対する考え方もあります。

インターネットを使うのに、コンピュータのしくみは知らなくても構わない。情報家電の雄、テレビを見るのに技術は必要ないし、トラブルはプロに任せればよい。情報は、扱う情報そのものに意味があるのであって、情報を運ぶメディアに価値はないのです。操作技術に学ぶ価値がないのと同じく、しくみにも価値はないのです。

これら相反する二つの考え方は、それぞれに理由があり、簡単に優劣をつけられる問題ではありません。しかしながら、普通のユーザーは、難しいことは知らなくてもよいとの考え方や、逆に、新しい技術やその技術を持つ人々をむやみに特別視することは、両者を隔てるばかりで、ますます技術をユーザーから遠く離れた特別なものにしてしまいます。技術は使うユーザーがあつてこそ、意義があります。メディアも運ぶ情報があつてこそ、ともに価値があります。

情報メディアセンターが発足して半年がたちます。情報技術とメディアを融合させる試みは始まったばかりです。この技術を育てるのは、ユーザー自身です。こんなことをしたい、という素朴なニーズが技術を生みます。本号に寄せられた実践や提言が、その貴重なシーズになることを期待します。